

ベルクソンの「良識の方法」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 砂原, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24271

ベルクソンの「良識の方法」

砂原 陽一

はじめに

ベルクソンの『意識に直接与えられているものについての試論』(以下『試論』と略記)は、持続である真の時間を空間化してしまう常識や知性的認識に牢固として浸潤している混同への批判を主題としている。そこには混合したものの純化の道のみが支配しているように思われる。しかし、『試論』を注意深く読むと、そこではむしろ混合的なものが重要な役割を果たしていることに気づく。それどころか、その自覚が「方法」として確立するに至り、以後のベルクソン哲学の深まりと相まっているともいえる。この小論は、「混合的なもの」に積極的な価値を置くベルクソンの見方に照明をあて、それを「良識の方法」として捉える試みである。

1. 外界との存在関係と認識関係の位相差

『試論』を読むとき、経験に先ず与えられているものと「深い反省」(DI.174)を経て初めてそこへと至る意識に直接的に与えられているものとの区別がこのほか重要である。後者がベルクソン哲学のいわば代名詞ともいえる一切の空間的なものの混入から純化された心的生活の真の実質だとされる純粹持続、すなわち不可分な相互浸透という形で多様な質的变化を織りなす意識の流れである。したがってそれに対して純化がなされる混在は最初から、排除されるべき負の性格を担わされている。だが混在は、外界と内面の心的生活の両方の領域にわたって認められるわけではない。外界で有効に通用する知性的認識を内面に適用した場合に、つまり進行を数え立てる場合に時間と空間の混在が生じ、その結果われわれは、意識に直接与えられるものとは別のものを掴んでそれを真実の事象だと錯覚する。確かに混在化は知性的認識の誤った適用の結果なのだが、ベルクソンは、知性的認識のそうした二つの領域の質の違いへの盲目ぶりには理由があると看做す。それはわれわれを取り囲む環境の知覚物を判明にすべく数え立て、そうすることによって社会生活のエネ

ルギーの消費を節約できるからである。つまり数え立ての場である等質的な空間という概念環境の外界への網掛けは、行動の利益に発している以上、その制限は止みがたいというわけである。ベルクソンは、自我が外界と接しているそのことがなほどうか知性的認識の空間の無制約の網掛けを誘うという。実際たいいの場合の自我は、行動の有効性を関数として現出する外界に生きる限り、常に公共的なものを参照し、言語による他人とのコミュニケーションをとることでいわば社会化している。ベルクソンは、社会化した自我が日常的行動の安定性を確保している半面、本当の己を亡失している事態を招いているという。実際朝に目覚まし時計が六つの音を鳴らす時、われわれはそれをメロディーのように全体として溶け合ったままの深い印象の変化として受け取ることは先ずせずに、大抵常にそれを空間に並置させて六つと数え立て、その数を受けて出勤や登校といった習慣的行動へと促される。ベルクソンは、意識状態を空間のうちに表象し、音と行動の観念との自動的結びつきを習慣化している自我を「表層的自我」と呼び、音をメロディーとして捉える「深い自我」と対置させる。ここには「意識の深いところへ降り行けば降り行くほど心理的事実を並置的事実として取り扱う権利が少なくなる」(DI.6-7)とするベルクソンの「深み」への価値優先性が示されている。けれども同時に、そこにベルクソンの不徹底も露呈している。

「深み」が既に空間的表象であることはともかく、「深み」こそが真なるものであるということは、生活している自我が通常の場合に表象する内面の在り方がその本来の意識状態とは別の形態をとっていることに他ならない。それゆえにベルクソンは、「深み」の純粹持続をそこなわずにそのまま把握するために一定の方法的手続を要請する。しかしなされるべき手続きはどこから始まるのか。それは当然「本質的に機械論的なものである常識」(DI.132)が抜き難く浸潤しているために常に空間的に表象する「表層的自我」であろう。そうであればこそベルクソンは、「表層的自我」のいわば宗教的回心ともいえる「抽象の激しい努力」(DI.67)とか「深い反省」(DI.174)といった内的否定の言葉をつらねる。この内的否定は、たとえそれが偽りの姿だとしてもとにかく外界に接して社会化されており、その限りで反省以前の経験の主体である「表層的自我」に施される。ところで「自我と外的事物との接触面」(DI.101)とは物同士の存在関係の言葉である。しかしベルクソンは、「深い自我」には「現実の自我、具体的自我」(DI.104)と確かな実在性を与えているのにひきかえ、外界と接しているこの自我については実在性を与えていない。ジルソンに言わせると、二つの自我は「非対称をなす」！。このことはベルクソンが「表層的自我」を「他方の

自我の外的投影のようなもの」(DI.173)と規定し、それにたかだか影の身分しか与えていないことから明らかである。そうすると「接する」という事態をどう考えるべきなのか。もっともベルクソン自身この問題に対してまるで無防備というわけではない。事実ベルクソンは、二つの自我ということで当然反論が予想されるそれが空間的区別であることを明確に斥ける。「われわれが人格を二分して、はじめに排除しておいた数的多数性を別の形でそこに持ち込んでいると非難しないでほしい。区別ある諸状態を認める自我も、ついで一層の注意を集中して、これらの状態がちょうど長く手に触れられた雪の結晶のように互いに融け合うのを見る自我も、同じ自我なのだ。」(DI.103)しかしベルクソンのこの予防がかえって問題の所在を浮き彫りにする。

われわれがこの予防の言葉から引きださうことは、ベルクソンは二つに区別した自我を存在のレベルで同位対立させているのではなく、実は一つの自我について、認識上のレベルで二つの異なる把握方式がなす真偽の区別を述べているのだということである。つまり「表層的自我」は、哲学的反省によって初めて露呈された空間的表象を無差別になす誤った自我でしかないわけである。そうだとするならばベルクソンは、「接する」という事態に不注意になった結果、認識によって影の身分しか持たせられていない「表層的自我」に存在上の身分を与えてしまっていることになる。その一方「深い自我」こそが現実の具体的自我であるとはいえ、この自我が外界に「接している」ということにはならない。こうした事態は、ベルクソンが明かす「深さ」の純粋性に悖ることになる。実のところ「深い自我」も反省による認識の言葉だといわねばならない。ということは、外界と存在関係にあるのは「表層的自我」でも「深い自我」でもないことになる。ベルクソンが「同じ自我」だという先の引用の言葉は、反省された自我についてのものである以上、反省以前のつまり二つに区別される手前に外界と具体的に接して存在関係を結ぶ一つの自我とは位相が異なる「同じ自我」なのである。ベルクソンは、反省以前に外界と接する自我の在り方を『試論』では明確にしていなくても、あまつさえ外界と接すること自体に負の要因を与えている。もっとも、反省以前に外界と接する自我とは事物と同じ仕方で世界に内属する身体であり、その外界との接し方は知覚でなければならないわけなのだが、その考察は『物質と記憶』でなされることになる。『物質と記憶』は身体と事物との存在関係の哲学でもあるのだ。したがって『試論』での身体への言及の少なさをあげつらうことは、いわば無い物ねだりであるだけでなく、『試論』が認識批判の書物であることを捉え損ねることでもある。とはいえ『試論』において外界の事物知覚が問題にされていないわけではな

い。そこでは「知覚」は次のように言及されている。「あらゆる瞬間の経験、意識の最初の微光とともに始まり、われわれの全人生を通じて続く経験によって、刺激の一定の価に対して感覚の一定のニュアンスが対応することが示される。そこでわれわれは、結果のある質に対して原因のある量の観念を結びつけるようになる。そしてついにはどんな既得の知覚の場合にも起こることなのだが、感覚の中に観念を移入し、結果の質の中に原因の量を持ち込むようになる。(傍線太字引用者)(DI.31)ただし、ここでの「既得の知覚(perception acquise)」が必ずしも存在の言葉で語られているわけではない。それは相変わらず認識批判の文脈で受け取られるべきなのである。本来質的な在り方をとる内界への外界に本質的な量的なものの侵入は、自我が外界と接することの存在関係からただちに導き出されない。それは外界にのみ妥当する認識の仕方を受批判的に内界に適用することに因るのである。

われわれは先に、「表層的自我」も「深い自我」も反省によってもたらされたものである限りで、世界との存在関係をもちえないと述べた。同時に前者と「接する」とされる外界も、反省以前の知覚主体に現出する知覚世界と等号で結ばれるわけではない。ベルクソンがいう外界は、ロビネがそれこそ経験に直接与えられるものだと指摘する <広がり>である知覚世界を知性的認識が必然的に具えている空間という観念図式によって捉えたものに他ならない。つまり物同士の相互外在性をつくる空間は、カントとは異なり、知性に属する第二次的なものでしかなく、外界の手前に知性に臨まれていない第一次的<広がり>があるわけである。見てきたように『試論』においては、知覚主体と世界との存在関係の考察が薄い最大の理由は、ベルクソンの一切を空間的に表象する<常識>批判への専心に求められる。しかしそれは飽くまで<常識>批判に尽きているのであって、広々誤解されていることだが、ベルクソンは決して等質空間そのものやそれを<広がり>に網掛けをして外界を構成する知性的認識そのものを疑い、告発しているのではない。ベルクソンは、外界の事物については条件と結果の必然的關係を規定する同時性が成り立つこと、さらには同時性の環境である等質空間に基づいて計量と予測をなす物理学的認識の妥当性については寸毫も疑っていないのである。要するにベルクソンは、外界と内面の心的領域に対して存在の上で価値の序列をつけているのではない。ただ外界の事物と内面の意識とはその在り方が異なる以上、物理学で成功を収めた諸原理を事象全般の唯一の把握方式だと倨傲にも信奉し、その余り心的現象を研究する心理学までもその原理を受批判的に適用するならば、それは根本的な誤りだとベルクソンはいうのである。ベルクソンからすると、事物と意識にはそれぞれの固有の在り方にふさわしい把握方式がある筈なのであって、それゆえにその

在り方に即さない知の形式は排除されるべきなのだ。心的領域に対する科学の主知主義的認識はまさにふさわしくない知の形式なわけである。『試論』の主導動機がこうした知性的認識の制限に向けられた認識批判にあるがゆえに、「表層的自我」やその否定を経て明らかになる純粋に持続する「深い自我」それらはいずれも存在の区別ではなく、知識形式の違いによる区別なのである。

2.混在しているものの純化における反省の構造

ベルクソンが『試論』で<常識>に向けられた批判は、知識形式の誤った適用を自覚せずに本来空間を占めないものを並置し、定義や分析を拒むものをあえてそうすることであった。ところで『試論』のベルクソンは、従来いずれも科学に括られてきた物理学と精神物理学を区別している。区別の理由は<常識>に対する両者の態度の相違にある。ベルクソンからすると、前者は<常識>に背を向け、後者は<常識>を延長する。後者について『試論』から引用しよう。「実を言えば、精神物理学は、常識にとっては親しみ深い考え方を精密に方式化し、またそれを極端にまで推し進めるにすぎなかった。われわれは考えるよりもむしろ口に出して語るものであり、また共通の領域に属する外的事物の方がわれわれの経験する主観的状态よりも重要性をもつので、その中にできる限り大きく外的要因の表象を導入することによって、これらの状態を客観化することがわれわれの関心のすべてとなる。そしてわれわれの知識が増すにつれて、強さに関するものの背後に外延的なものを、質の背後に量を認めることが増々多くなり、また第一の項の中に第二の項を置き、感覚を大きさとして扱う傾向も増々多くなる。物理学の役割とはまさに、われわれの内的状態の外的原因を計算にかけることであるが、物理学はこれらの内的状態にはできるだけかかずわかない。そのため絶えずそして故意に、物理学は諸状態と原因とを混同する。それで物理学はこの点について常識の錯覚を励まし、さらに誇張さえるのである。」(DI.52)引用のなかの「物理学」は *psycho* が抜けているが、心的状態を扱う精神物理学(*psychophysique*)すなわち心理学のことである。確かにベルクソンの<常識>批判は、<常識>に根ざしてそれを延長する物理科学的認識方法の批判、つまりその妥当しない領域への越権に向けられ、その仮借のなさはデカルト的方法的懐疑の徹底性にも比せられうる強力な否定性に貫かれている。けれどもベルクソンのその際の批判は、その方法を専らに駆使する現代心理学がその確証に専念している「事物がある形式を通して知覚されるものだ」という根本前提に対してのみならず、なかんずくそれがわれわれの体質にまでなっている由々しき事態に対し

てであることに注意すべきである。つまり批判は心理学が犯している物理科学的認識方法の越権に対してであって、その方法そのものに向けられているのではない。ベルクソンは、物理学の多大の成功の理由をそうした<常識>を排除した点にみているほどである。物理学は、外的事物の深い研究を企てた際に、物を純粋に物として把握すべくわれわれの内界に由来する形式を排除したことによって逆の越権を排除したのである。つまりベルクソンからみた物理学の成功は、物の領域で、量と質、広がりと持続、同時性と継続との妥協的な概念、例えば「力」や「事物の継続」といった観念を排除した点にある。そうであるならば、科学を標榜する心理学も内界に関して物理学と同様に、なぜ外界に由来する形式を排除して「強さ」、「持続」、「有意的決定」といった観念を分離的に純化して、心的なものとしての直接把握しないのか、とベルクソンはいうのである。「延長と持続というこの二つの要素を、科学は外的事物の深い研究を企てる場合には分離する。われわれは、科学が持続から同時性だけしか保有せず、運動自体から運動体の位置、すなわち不動性しか保有しないことを証明し了えたと信じている。分離はここでははっきりと空間に有利のように行われる。したがって内的現象が研究されるときにもやはり分離が行われるべきであろうが、しかしそれは持続に有利なようにである。」(DI.172)結局<常識>を延長し、混合的なものをそのままに扱うのは精神物理学なのであって、物理学にはそうした誤認は当てはまらないことに注意すべきである。

ところでベルクソンは、心的なものとしての直接把握しようとする際、不純物である空間と心的領域に固有の持続とを対等の身分で対比させているのではない。ジルドゥルーズが指摘するように³、ベルクソンは実のところ、物理学の観念の純化の方法に倣い、空間と時間の混合を二つの純粋な方向に従って分割する作業の徹底的遂行の際、時間の方向だけが純粋であって、空間の方向は時間の質を変える不純物でしかないとしている。既述したように、この空間の方向は、物理学的認識方法についてみずからが妥当する外界とは根本的に異なる事象領域への誤った適用に基づくのだが、しかしこの適用批判が、唯一純粋である心的領域の直接把握から知性の使用を排除することにはならない。つまりベルクソンは、時間と空間との「折衷概念」(DI.73)の分化の作業の際、その作業によって透明になった持続の直接把握の方法そのものに対しては分離による純化を及ぼしていないのである。事実ベルクソンは、持続である意識の動的流れに参入し、それを内側から感得しうる「有機的で生き生きとした知性(l'intelligence organisée et vivante)」(DI.101)とか「われわれの知性はその本能を具えている」(DI.100)といった混合的な言葉使いにためらいが

ない。この知性は、物理学の根幹をなす知性的認識の曖昧さのなさからするとおよそ科学になじまない。けれどもベルクソンからすると、心的領域の直接把握には知性的認識とは根本的に異なるタイプのこの知性が是非とも必要なのである。

ベルクソンは、こと心的領域の直接把握に関して科学の知性的認識とは別の知性の働き方を認めている。哲学的反省がそれである。しかしこの『試論』の解釈は、いささか挑発的に聞こえるかもしれない。というのもベルクソンは、心的領域に固有な持続、強度、質を空間においてのみ妥当する並置、大きさ、量に置き換える事実誤認の因るところを反省的意識に帰せしめているからである。次の引用がわれわれの解釈に対する反論の根拠として挙げられるかもしれない。「心的状態のそれぞれ区別のある多数性を形成するために、われわれがそれらを空間内に投影することがそれらの心的状態に影響を及ぼし、反省的意識の中でそれらに新しい形を付与せずにはすまぬのであるが、そのような形は直接的統覚によっては与えられなかったものなのだ。」(DI.67)いうまでもなく反省は、自己の精神状態を観察すべく、他に向かっていた意識のベクトルを内に折り返して自分自身を二重化することである。だがそこには精神が反省によって自己を捉えるために負うリスク、つまり<反省するもの>と<反省されるもの>との隔たりに因って反省される精神をそのままに捉えることの困難という必然的な事情が伴う。とはいえ、ベルクソンが心的持続の空間化という知性的認識の誤りを帰しているのは、こうした反省のもつ構造ではない。ベルクソンは精神の反省の働きそのものを批判したり、ましてや否定しているのでもない。実際そうであるがゆえにベルクソンは、空間的性格を本来もっていない真の自我を取り戻すために「深められた反省」(DI.174)を要請する。なおのこと、先の引用の中でベルクソンは、「反省的意識」と「直接的統覚」を対立させているけれども、後者が哲学的深化とともに方法としての「直観」にまで精練されていくことに鑑みると、両者が必ずしも対立の関係にないことが判る。事実『創造的進化』の中で、ベルクソンは「直観と私がいうのは、本能が利害から自由になって自己を意識し始め、対象を反省しながらその範囲をとめどなく拡大できるようになったとして、そうした発展した本能のことである。(傍点引用者)」⁴と、反省という知性の働きに本能がいわば合体した形の科学的認識とは別の知性を打ち出している。結局、反省意識に帰せられる心的持続の空間化による歪曲は、反省そのものではなく、反省の際に忍び込む科学的認識に因る。したがって心的事象の把握にあたって、空間化を本質とする科学的認識の排除がただちに反省の放棄にはならない。あるいは同じことだが、空間を介さずに心的事象を直接捉えるためには知性の徹底的な排除は許されないと

もいえる。

ベルクソンは、心的事象を歪めることなく捉える知の形式を「直接的統覚」としているのだが、これを時としてなされるベルクソンの「直観」についての対象との合一という表層的な理解が与える意味で解釈されてはならない。ジャンケレヴィッチが指摘するように、そもそも『試論』の中ではまだ「直観」は存在していない⁵。われわれは「直接的統覚」に反省という知の契機をみる。だが、ベルクソンのこれについての様々の言い換えは、持続を持続そのものとして捉える方法を呈示することの確信に至らずに不確定に揺れているようにも思われる。というのもベルクソンは、この「直接的統覚」を「自我が生きることに身をまかせる」(DI.67)とか、「自己に立ち帰って虚心になる思考」(DI.75)と言い換えているが、もしわれわれがこれらの言葉をひとつの呼びかけ以上のものとして受け取るならば、実のところその内実の理解に困難を覚えるしかない。とはいえ文学的ともいえないこれらの言葉から、ベルクソンが科学的知性ならぬ本来の反省的知性をも排斥したと考えるべきではない。「深められた反省」(DI.174)、「反省の力強い努力」(DI.175)、「注意深い意識」(DI.177)などの別の言葉が、あるいはわれわれの見解を支えるであろう。主知主義的反省は心的持続を、実は空間にほかならない無時間的等質環境において、不連続な諸項の並置として観察する。けれどもこの反省を深めるとは、空間化を保持したままにそれを強化する程度の問題ではない。「深められた反省」の本当の意味は、主知主義的反省を排除して真直ぐに意識の直接与件という事象に向かう反省の反省であるほかはない。さらにまた、ともすれば意識の直接与件を対象性の形で虚構する意識の不用意な態度を監視し、吟味するのが「注意深い意識」である以上、それもまた誤った反省の仕方を批判するひとつの反省であらざるをえない。意識の純粋持続に立ち還るうえでの「直接統覚」は、反省を排除しつつなさなければならぬ自己点検の知的営みなのである。それゆえ「直接統覚」は、知的な観察という側面を保持し続ける限りで、心的事象との融合ではありえない。事実ベルクソンは、心的持続の空間化の因るところについて、「われわれは直接的な自己観察を行う習慣をもたず、外界から借りてきた形式を通して統覚する。」(DI.116)と、観察と統覚を等号で結んでいるほどである。もっともここでの「直接的な自己観察」は、力強い労苦によって得られた数学的知性に侵されていない素直な反省である。素直な反省に与る己の分をわきまえた知性は、科学法則という介在物を自己観察に持ち込むことなしに真直ぐに己に向き合う。ベルクソンの一見混合した物の言い方である「生き生きとした有機的知性」というのはそうした知性のことなのだ。

3. 純粹持続になお見出される混合的なもの

「生き生きとした有機的な知性」が心的内面において把握したものは、物理学が扱う物の性格に他ならない量的多様、等質性、相互外在性、不可透入性、同時性に対して、それらときっぱりと対照をなす質的多様、異質性、相互透入性、継続性という性格である。確かにここには空間という不純なものはもはや排除されている。だがわれわれはなおベルクソンに問いを突きつけることができる。こうした心的事象のさまざまな性格規定が相互に矛盾なく成立しうるのであるのか、ひいては空間と時間がその性格について上の対照通りに截然と分離されうるものなのか、と。あるいは心的持続のそれらの性格が、空間のもつ性格との対比ぬきにそれとして規定しうるものなのか、と。

ところでベルクソンは、なにをもって心的持続の根本性格を異質性と規定するのか。ベルクソンはまず、心的持続から排除されるべき空間の等質性という性格を解明し、しかる後にそれではないという形で持続の異質性を浮き彫りにする。ここに二元的対立を最大限に利用するベルクソン哲学の特質がある。具体的にそれを論証しよう。空間の等質性は、端的に言うとは、断絶なく一様な形で広がっていることを意味する。それによって空間は、物同士の<そこ>と<そこ>という相互外在的場所関係を成立させる。さらにベルクソンは、空間のこの等質性が物を数えうることの条件をなすとする。ベルクソンは、物質的対象を数え立てる際、その総和の算出をうるための第一の条件として、「数観念が絶対に同類同士である部分あるいは単位の多数性についての端的な直観を含むこと」(DI.57)、第二の条件として、数え立てられるべき物質的対象を同時性において表象することを挙げる。数えて総和に至るためには、これまで加算されてきた諸項が次の項へと数え立てを移行させるときにもなお留まっただけで、次の項がそれらに加えられるのを待っているのではなければならない。それを可能にさせるのは加算の土台が加算の最中に消失してしまわないこと、つまり概念環境としての空間の恒常的存続性である。数える行為が時間の経過とともにあるにしても、数えられる対象の環境は無時間的同時性にあるわけである。以上を鑑みて、ベルクソンがこれと対比させている心的持続の性格である異質性をみてみよう。それはまず、空間の一様な形で連続した在り方とは逆に、不連続を意味する。だがこうした持続の性格規定は、なにほどかベルクソンの持続についての間断のない継続性という一般に流布している理解に反するように思われるかもしれない。しかし加算の場合でいうと、総和に達する意識の継続において、本当の事情は「現在の瞬間にそれに先行する諸瞬間を加えるときには、それらの瞬間は永久に消え去ってしまっているのである。」(DI.54)われわれはこ

ここに持続の異質性の一つの在り方を指摘しうる。つまり継続の諸局面が現在の瞬間として現われるや否やすぐさま流れ去って過去へと消失し、それゆえに現在の瞬間がもはやない過去とまだない未来に対して現在の突出性というユニークさをもつこと、それが異質性の一つの意味である。だがベルクソンの持続の構造に鋭い分析のメスをあてたアンドレ・ロビネが指摘するように⁶、われわれは、消失の異質性をもって持続の性格を規定し尽くすことはできない。持続にはこの瞬間の現前と消失の交替という不連続性の性格の他に、決して消失してしまわずに相互透入や融合という形で潜在するという性格もあるからである。ロビネの分析に従うと、相互透入の側面から捉えられた心的持続は、二つの異なる方向をもつ。その一つは、現在が過去をはらみつつ未来に向かって三つの時制が不可分の形でいわば雪だるま式に進展して行く水平方向である。今一つの方向は、意識の全体が現在のこの意識の僅かな一小部分にもすっきり現前し、「真にわれわれのものとなっている観念がわれわれの自我全体を充たす」(DI.101)垂直方向である。実際この方向は、『試論』に続く『物質と記憶』で、「無意識」に他ならない「純粹記憶」の人格への総合として示される。ちなみにベルクソンはこれを、「純粹記憶」が現在の状況の判明化のために記憶心像に実質化する過去の利用の仕方である「低度の精神生活」と対比させて「高度の精神生活」という。してみると、ベルクソンが心的持続の根本性格とする異質性をとってみても一義的に定義できないことになる。正しくは、ロビネの言葉を借りると、持続は「現在の両義性」⁷という事態をもつといわねばならない。つまり現在において捉えられた持続は、その見方によって不連続であると同時に連続であるという両義的な構造をもつ。われわれは『試論』での混合したものの純化というベルクソンの根本発想が実は、認識の面でも存在の面でもなお混合を残存させており、あるいはむしろ対立する相手を利用さえしていることに気づく。実際、持続の「直接統覚」にあたって排除されるべき空間もまた、持続の二つの異質性のいずれかを軸にするかに応じて二つの異なる性格が帰せられる。「われわれの外部では持続のうちの何が存在するのか。現在時だけであり、あるいはこう言った方がよければ、同時性だけである。確かに外的事物は変化するが、しかしその諸瞬間は、それを記憶する意識にとつてだけ継続するのだ。(DI.170)空間における事物の変化を意識の変化にのみ帰することによって、空間一切が現在時に切断されるここでの観念論的主張は、心的持続の相互透入の連続性と対をなす。他方、持続の消失の異質性の不連続性には、空間が等質的に連続する實在論が対をなす。

ところでベルクソンは、反論や定義、総じて対象的論議を拒む「自由」の事実性を内側

から感得すべしという『試論』の中心思想の下で、持続のおのずからの熟性-それが自由の内実とされる-に焦点をあてている。したがってベルクソンは、それが持続の異質性の一側面ではないにもかかわらず、相互透入の連続性のみをもってその唯一の構造とみなしているともいえる。けれども心的持続がベルクソンの言う通りのものであるためには、是非とももう一つの異質性の側面である消失の不連続性を見逃すわけにはいかない。というのも、持続の推力ともいうべき今という瞬間を過去へと潜在化せしめる作用があつてこそ、「同じ瞬間が二度と現われることはない」という異質性の本質的な事態が根拠づけられるからである。してみると、それこそが唯一時間に他ならない心的持続から空間を排除する『試論』の議論において、持続と空間いずれも二つの対立する構造をもたせられている。しかもその構造は、それ自身だけで規定されえず、互いに対立するものとの関係の下ではじめて明示される。あるいは双方がもつ二面をたすき掛ける形で、他方を規定するものをおのれの規定としているともいえる。実のところベルクソン哲学には、『試論』のベルクソン自身が気づいていないにもかかわらず、複合したものがその展開の発条になっている。ところがロビネは、「不連続性が[空間の]等質性を基礎づけ、異質性が[持続の]連続性を基礎づける点にベルクソンの思索のためらいがあるし、この作品の不出来がある」⁸と批判している。なるほどベルクソン哲学を静態的に捉える限りで、ロビネの一面的という批判もあながち的外れではない。しかし持続の異質性一つとっても、ベルクソンがその両義的な面を表明していないにもかかわらず、対立するものなしには事象を規定しえないという動態的な発想の方に眼を向けるべきである。ベルクソンのその後の哲学の歩みは、混合したものの純化によって得たものを再び統合し、よつてもつてその統合の動きそのものを真の事象と見ることであった。

イポリットは、ベルクソンが『試論』に続く作品『物質と記憶』をものした理由を、「世界内での自由実現の条件」とか「持続の受肉」⁹といった『試論』では欠落していた問題の充填にみている。またマドールは、『試論』が混合している諸要素の分離を、『物質と記憶』はそれら分離したものの関係をつける」¹⁰と、二つの作品を一体のものとして捉えていけば分業説を唱える。確かに『物質と記憶』は、デカルト以来の伝統的な哲学問題である心身関係に解決を図った書であり、したがって記憶である心的なものと空間的なものである大腦との関わりを問うことは、『試論』の主題と無関係ではありえない。その点でイポリットもマドールも、二つの著作に主題の上での連絡をつけたことは間違いではない。だがわれわれは、主題とは別の視角からベルクソンの哲学的深化を浮き彫りにできると思う。そ

れはベルクソンのみずからの方法についての自覚の深まりである。

ところでベルクソンの方法としての直観の確立の経緯を素描したロビネは、「良識」に注目する。それは『物質と記憶』に先立つ一年前、「良識と古典教育」と題された講演の中で表明されている。われわれもまた、ベルクソンの方法の自覚という観点からこの「良識」を見逃すことができない。「良識」は『試論』の「深められた反省」の延長線上にあるといつてよい。「深められた反省」を行使するのは、常に行き過ぎに対する自己点検を怠らない「生き生きとした有機的知性」であった。「良識」も知性の行使と抑制という両面的機能をもつ。ベルクソンは言う。「私は良識とは一部は知性の活動的な構えにあり、また一部は知性の自分自身に対するある不信にあることを示そうと思う。」¹¹ベルクソンによると「良識」は、論理的推論や熟慮を待たずに困難をずばりと解決する実際の勘ともいべきものである。それは或る独特の感覚であつて、「決定の速さとその本性の自発性によって本能に近づく」¹²にしてもその手段の多様さと形式の柔軟さによって本能から区別される。かてて加えて「良識」は、現実的なものへの配慮とあくまで事実と接触していこうとする執拗さをもつ。その点で科学に本質的な実証性への志向と類同的であるといえるかもしれない。しかしベルクソンは、「良識」はなるほど科学と似ているかもしれないが、決定的に相違する点があるという。それは「良識」が科学のように決定的正しさの普遍的真理をめざさないことである。「良識」は常に己を反省的に点検する自己言及性を欠くことがない。すべての問題を新しいものとみなし、生硬な論理が現実のニュアンスを押し潰しそうになる間際で立ち止まる柔軟さと慎みをもつ。それゆえ「良識」は、知性というよりはむしろ、知性を内側から規制する「知性の内的エネルギー」¹³であり、そうしたことからベルクソンは、「良識」を「本能以上、知性以下」¹⁴と位置づける。

ベルクソンは、『試論』の「深められた反省」から「良識」を経て、平衡をとりつつ本性の異なるものを媒介させるいわば「良識の方法」を獲得していった。『試論』から『物質と記憶』へのベルクソンの著作の取り掛かりは、問題関心の移行であることはもとより、「良識の方法」の具体的適用とみることができる。

4. 『物質と記憶』での「良識の方法」の具体的適用

ベルクソンは先ず、『試論』では心的持続の質的な在り方と対立させられていた外界の事物の量としての在り方を再検討する。その結果ベルクソンは、物質に対しても「われわれ自身の意識の連続と何か似たところがなくはない」(MM.227)ものを認めるに至る。これ

は、ベルクソンの「良識」が自然を「さまざまな持続の全体」¹⁵として捉えたとはいえる。こうしたベルクソンからすると、物質はそれ自体で固有のリズムをもっており、もしわれわれの意識の持続がそれと歩調が合うほどに緩慢であるとする、知覚される物質の性質はおのずから分解し、ただ連続的に反復する振動を感じるだけになる。したがって、まったく質から分離された純粋な量は存在しえないことになる。確かに科学は、物質の変化を認めた上で、それを計算にかける。だがベルクソンからすると、計算に掛けられる量は、「それらの異質性が十分希薄になって、いわばわれわれの観点から実際上無視できるほどになればそれでよいわけなのだ。」(MM.203)それとは逆に、知覚の対象の質は、記憶が無数の物質の振動に他ならない純粋知覚を濃縮化させたものである。してみると量と質は、『試論』での通約しえない本性の違いを失い、緊張と弛緩という傾向性の度合いをも一つの事態の二つの在り様だということになる。「良識」は質化した量、量化した質を捉える。ベルクソンは、「良識」によって捉えられるこの混在化したものこそが具体的経験に直接与えられるものとしたのである。

ところで、知覚を具体的なものにする記憶の作用には今一つの働きがある。それは現在の行動を適切にするために過去を援用する再認である。ベルクソンは、振動を縮約する記憶に対してこれこそが「記憶の実際的なしたがってまた通常の作用」(MM.82)だとする。われわれは、この記憶による過去の援用の仕方にベルクソンの「良識の方法」の特徴を見ることができる。この仕方には複合したものが混在している。しかし経験に直接与えられるものが混在したものだからといって、その直観が「良識の方法」であるのではない。『物質と記憶』のベルクソンは、一度は純化という哲学的徹底性を行って「経験をその源泉にまで求める」。(MM.205)つまりベルクソンは、事象を原理的に構成している対立する二つの権利上のものを先ず方法的に確保し、しかる後にそれらを混在化させて中間状態を得ることによってそれを事実上の実際の事態とする。

ベルクソンは先ず、再認を構成する権利上のものとして本性を異にする記憶の二つの形式を取り出す。その一つは「習慣記憶」であり、今一つは「思い出記憶」である。ベルクソンは、一つの学課を暗記する際の経験を實際例にとり、それらの根本的相違を明示する。暗記の成功とは、始めに学課の句節を区切って何度も繰り返し読み続けるうちに言葉同士がうまく結びついて全体として一つに組織化されることである。なるほど人々は、暗記の成功によって学課が「記憶された」という。だがわれわれは、その過程の諸段階を想起し、そこにまったく性質の違う記憶が働いていることに気づく。暗記の練習のため

に行われた朗読のエピソードを想い出すとき、それは個性的状況を伴う私の歴史の出来事である。その記憶心像も暗記と同様に記憶と呼ばれる。だがベルクソンからすると、それら二つは名称が同じでも、まったく本性を異にする。暗記は記憶されたものであるにしても、その実は努力の反復によって身体の運動機構に組み込まれるに至って習慣と化したものである。したがってそれは過去を表象するのではなく、過去を自動的に演じる常に現在時制の行為である。しかるに朗読の場面想起は、暗記のように努力の時間経過を要せずに、一幅の画面を思い浮かべるように一挙になされる。そもそも想起が可能なのは、潜在的な形で既に覚えているからである。記憶は誕生以来の全ての出来事について、「日付と場所」をもった個的な有り様のままで細大漏らさず自動的に保存する。ベルクソンは、この「思い出・記憶」が「本当の記憶」(MM.168)だと主張する。というのも従来の心理学が、有用という理由で「習慣・記憶」にのみ専ら注目して「思い出・記憶」をその初発段階としかみなさなかつたからである。確かにベルクソンが二つの記憶を根本的に区別したのには従来の記憶理論批判がこめられており、それゆえにあえて極端な形でその二つを呈示したという側面がある。けれどもわれわれは、そうした呈示をベルクソンの方法の実際の適用の結果として捉えうる。

ベルクソンは、根本的に区別された二つの記憶が実際上純粋な形で存在するとは考えていない。それは「純粋状態で考察された記憶の極端な形式」(MM.95)という言葉から明らかである。二つの記憶が混在している「中間的諸状態」(MM.96)が事実に存在する記憶である。だがベルクソンは、「混在」という言い方に注意を促す。というのも従来の心理学は、記憶の不純な諸形態に拘泥してそこに分離なしの混合現象しかみなかつたからである。つまり混合現象を構成する原理的なものに思い及んでいなかったからである。しかるにベルクソンの「良識の方法」は、「二つの要素、すなわち記憶心像と運動とを分離し、しかる後にどのような一連の操作を経て、それらが本来の純粋性をいくぶんか捨てて相互に融けあうようになるかを調べる。」(MM.95)

ベルクソンの方法を貫いているのは、『物質と記憶』第七版の序で宣言されている「常識の態度」である。それは、实在論と観念論がいずれも行き過ぎているとしてその間に身を置く態度である。この「常識」は、『試論』で批判された心的持続を空間化する常識と区別されなければならない。「常識」は、権利上のものをきっぱりと分離し、しかる後に相互に中和させて事実上のものに定位する方法に裏打ちされている点で後者と異なる。「良識の方法」が最も際立った形で看取されるのが再認の考察である。

われわれの知覚認識は、その殆どが再認である。ベルクソンの「良識」は、過去を現在の中で把握し直す再認についても原理的に対立する二つのもを捉える。ベルクソンはここでも再認を可能にする条件を問い、先ず権利上のものを経験から分離する。「先ず極限において瞬間における再認がある。」(MM.100)理論上のものとして呈示されたこの再認は、表象による記憶心像の介入を待たずになされる状況への身体による反応である。これは「自動的再認」と呼ばれ、例えば、町に住み慣れてくることの基礎にはこの再認の形成がある。最初は断たれていた事物知覚と行動の結合が段々と組織化されていくに従って、知覚がただちに行動に転化し、いわゆる何も考えないという事態に至る。つまり「自動的再認」は、知覚に随伴するよく組織化された運動反応についての意識といえる。

ベルクソンは、再認の今一つのものとして「注意による再認」を挙げる。これは精神が過去に赴いて、記憶を知覚に重ねて事物の細部を一層判明にする再認である。だがこれは「自動的再認」と対立するけれども、対立極をなす権利上のものではない。というも「注意による再認」は、「自動的再認」をみずからの基礎とし、それを包括する再認の形だからである。対立する極は、「注意による再認」がそこから発する「純粹記憶」にある。その際、「自動的再認」を主導する身体が「純粹記憶」との関わりにおいて重要な役割を果たす。

過去は「思い出記憶」という形で自動的に保存される。そうだとすると、未来に向かう意識が過去の思い出にふけることは、行動の実効性を損なわせる。行動するとは過去への関心を閉ざすことでもある。ベルクソンは、この閉鎖をなすのが身体だという。つまり「自動的再認」をつくる神経系の感覚・運動的平衡が習慣的行動の実効性を保証すべく「思い出記憶」の跳梁を抑止する。逆に言うと、知覚が促す行動を止めてこの抑止が緩むと、記憶が喚起する。その際、潜在する過去の地平のすべての記憶の中から記憶心像の選択的現実化がなされるのだが、その選択の理由は他ならぬ現在の知覚との類似である。すると知覚に随伴する身体の運動は、一方で記憶心像を遠ざけ、他方でその現実化を準備するという両義的機能をもつことになる。「機械的な再認を引き起す運動は、記憶心像による再認を一方では妨げながら他方では容易にしているといえるであろう。」(MM.145) われわれは、哲学の方法という観点から、事象に両義性をみてそれを哲学の根幹にすえるベルクソンのしなやかさに注目する。「良識の方法」は、事象にしなやかに寄り添うことでもあるからだ。それはとりわけ「注意」の積極面に看取される。

「注意」の内実は、記憶心像による知覚の補完である。補完といってもその結びつき方は直接ではない。身体の初発的筋肉感覚という形で対象の大まかな輪郭を素描する「運動

図式」が、記憶心像が流れ込む「空虚な器」(MM.145)となって知覚と記憶心像を媒介する。ベルクソンはこの媒介の重要性に気づき、それが物質と精神の極端な対立を廃棄するのみならず、そこから確固とした方法を得た。「運動図式」を不可欠とする「注意」の構造を正確に言うと、先ず習慣的自動運動を止める。引き続いて「運動図式」が選択枠組みになって、イデーや「志向」(MM.135)してのみ潜在する「純粹記憶」のうちから対象と類似のものが記憶心像に実質化して対象に重ねられる、そうした一連の過程である。ベルクソンは、この過程を閉じた円環にも比せられる「回路」(MM.114)として捉える。つまり対象から始まる動揺が精神の深みを経由して再び対象に帰ってくるわけである。回路は、意識の様々の水準に応じて多数の同心円をなす。われわれはなによりも、この同心円の多数の描かれ方にベルクソンの確立した事象を捉える「良識の方法」を見る。ともあれ同心円は、注意の集中によって得られる対象の細部の判明さに対応して収縮と膨張の伸縮自在性をなす。量と質との截然とした対立を廃棄した緊張と弛緩の方法的概念と共に、「注意による再認」における収縮と膨張も二元論の克服に与っている。精神が緊張と弛緩の間を動く在り方に注意されるべきである。

注意の回路の動的構造は、「純粹記憶」・「記憶心像」・「知覚」の一連の過程が本性を異にするそれぞれのものの段階的移行にあるのではない。それは、それぞれがどこで始めてどこで終わるかが分明ではない「動的進行」(MM.142)にある。なるほどこの考えは、直接的には記憶の連想説に対する批判として打ち出されている。けれども『試論』で既に芽生えていた「混合的なもの」の評価を哲学の核に据えたとみるべきである。それだけではない。『試論』では専ら心的持続にのみ言われた「動的進行」は、外界知覚と記憶の本性的に異なる次元に渡るまでに及ぼされている。萌芽の形でしかなかった方法が確立に至ったといえよう。ところで連想説は、単純なものから事象を構成するという原則に従って、心理状態の区別された局面のおのおのにおける不安定なものを安定したもののために犠牲にする必要が生じ、そのために知覚が問題になる場合にはそこに感覚の寄せ集めだけを見てそのおぼろな記憶心像を見落とし、また記憶心像が問題になる場合にもそれを知覚の微弱な状態とみなしてそこから現実化してきた潜在性の次元にある純粹記憶をみることがない。要するに記憶の連想説は、事象そのものをなしている本性的に異なるものの混在した有り方を捉ええないわけである。それにひきかえベルクソンは、「動的進行」にあつて本性を異にするものの「癒着」(MM.142)やそれぞれの局面の「不安定さ」(MM.149)といった事実上のものに照明をあて、権利上のものとして呈示された純粹知覚と純粹記憶、総じて

空間的なものと時間的なものとの極端な対立を解消させる。とはいえ「動的進行」においてそれぞれのものが本性を失って一様と化するのではない。ロビネの言葉を借りると「動的進行は、純粹知覚と純粹記憶との間にある本性の差異に関して得られたものを廃棄すると同時に実現する。」¹⁶

「注意による再認」にその典型が見出せる「良識の方法」は、以後ベルクソンの根本的な哲学のスタイルになっていく。その論証は、今後の課題である。

(金沢大学人間社会学域人文学類教授)

注

1 Bernard Gilson, *L'individualité dans la philosophie de Bergson*, LIBRARIE PHILOSOPHIQUE, J.Vrin, 1978, p.14

2 André Robinet, *Bergson*, Seghers, p.59

3 ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』、宇波彰訳、法政大学出版社、34頁

4 Henri Bergson, *L'Évolution Créatrice*, P.U.F., 1969, p.178

5 Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, P.U.F., 1959, p.49

6 Robinet, 前掲書、p.30

7 Ibid., p.32

8 Ibid., p.54

9 Jean Hyppolite, *Aspects divers de la mémoire chez Bergson*, Extrait de la *Revue international de Philosophie*, 3^eannée, n°10, Octobre 1949, pp.472-3

10 Maddleine Bathélemy-Madaule, *Bergson*, Seuil, p.62

11 Bergson, *Mélanges*, Année1895, P.U.F., p.360

12 Ibid., p.362

13 Ibid., p.365

14 Ibid., p.363

15 Henri Bergson, *La Pensée et le mouvant*, *Introduction à la métaphysique*, P.U.F., p210

16 André Robinet, 前掲書、p.75

文中ベルクソンのテキストからの引用で、DI は *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P.U.F., 120e édition の略、MM は *Matière et Mémoire*, P.U.F., 92e édition の略

